

MS Emblem Collection・2



MS-06J



MS-06V



MS-07



MS-07



MS-09



MS-09



MSM-03



MSM-07

MOBILE SUIT VARIATION

MSV

Hand
Book

2

模型情報・別冊MSバリエーション ハンドブック

機動戦士ガンダム

BANDAI



コアファイターの開発と 連邦軍MSの誕生

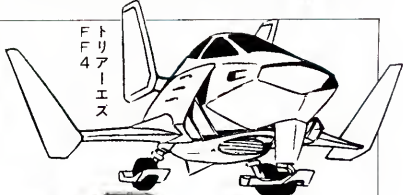
地球全域が連邦化されるまでに幾多の戦争が積み重ねられ、兵器開発は二十世紀後半より限界点を迎えた。航空機開発上の技術的問題は、電子兵器戦では頂点に達したまま約三十年もの歳月を数え、連邦政府に統合後も在来の軍事統合系統は、ほぼ旧態のまま用いられていた。

連邦軍の軍備は航空機を主体とする物であったが、旧態の勢力均衡の産物たる監視衛星の残留により、大気圏内用航空機には新機軸等の研究は成されず、二十世紀末に見られた程度に留まる物であった。しかしながら宇宙空間への軍備拡張は、大戦艦主義と附随して戦闘機の開発が行なわれた。先行した戦艦の建造による行動半径の拡大は、燃料消費量の多い戦闘機にとっては、この上ないホームベースとなる。連邦軍には軍事メーカーとしてハービック社とウィックウエリントン社が対峙していたが、統合後の経験の浅いハービック社は軍部から比較的冒険度の高い実験機の要請が多く、各方面での再確認の内容を持つ機体を次々に製作して行った。

在来型の戦闘機は、航続距離の短かい物を主体として局地戦闘機に重点が置かれていたが、宇宙戦での対応と

予測される範囲での防衛力として、大気圏内外で近接する空域で最も戦闘力の高い機体へ観点は移行していったのである、ここでハービック社の新用途戦闘機は段階を四つに分け、高々度戦闘機、小型戦闘機、空間戦闘機、空間戦用攻撃機の方へと展開する。小型機FF4タイプと、空間戦用機FF-S3セーパーフィッシュは開発を順当に終えたが、高々度戦闘機のエンジントラブルをかかえたまま、ジオン公国の奇襲作戦が開始され、各サイトに駐留する艦隊は、わずかの内に全滅を余義なくされた。モビルスーツに関するデータを少しずつ回収した連邦軍は、プロジェクトチームを編成し、続く地上部隊侵攻に対してモビルスーツの開発に着手した。移動システムは、重量配分を考慮してキャタピラ走行を採用し、ミノフスキー粒子による干渉をさける事を第一目的としたコンピュータシステムの開発が並行して行なわれた。さらに学習機能を持たせる事によって、交戦データの処理を行ない、短期間での戦闘力の向上にも努められた。そこでこの新技術を敵と交戦した際も回収、かつパイロットの保護にも能力を発揮する物として考案されたのが、コアファイターである。開発途上にあつたFF-16とFF-X7は、このフランヘ統合され、モビルスーツのコクピットと共通となるブロックシステムへの変形機能も与えられた。FF-X7の要請内容はあきらめられていたが、行動半径は別として格闘戦性能は良好なため、通常戦闘機としても採用された。

トリアーエス
FF4



コアファイター

小型局地戦闘機トリアーエスFF-14とコアファイター。FF-X7としてなら同時期スタートだが、コアファイターには異なる存在意義があった。両機にはハービック独特のデザイン系譜を見出す事ができる。

Gアーマーシステムと コアブースター

RXスーツの最大の特徴は、脱出システムと操縦システムを一体化した事にあつたが、換装を目的とした構造設計は、その後の連邦軍の兵器開発に大きく貢献した。大型揚陸艦として母艦となるホワイトベース級との並行開発によって、モビルスーツの攻撃能力は大きく裏付けられたが、単体での移動性には問題があつた。ビーム兵器を標準装備化しているため、エネルギーの消耗率が高く、機体の軽量化に重点が置かれていたためロケット燃料の搭載量が比較的少なかったためである。

モビルスーツにするために、脱出システムとしてコアファイターを内蔵したRXスーツであつたが、先述の移動力を補う手段として連邦軍が出した解答は、RXスーツ（RX-178タイプのみ）にさらに飛行用ユニットを設けるという物であつた。RXスーツの実用試験が終了し、実験部隊がデータを出してから急造されたこのプランは、コアファイター、Aパーツ・Bパーツを個別に考え、同規格の換装部分をフルに活用する物である。すなわち、コアファイターを基本として操縦系を持つ中距離支援用戦闘機が2機種、これはBパーツをくるむ形のメインエンジンユニットを、ブースター的に使用し、Bパ

ーツを装着したままコアファイターに操縦系を移す物とコアファイターを直接装着する物である。

Aパーツにはカバリーユニットがかぶり、独立した降着装置となるキャタピラタンクを前へ移し、カバリーのビーム砲を使ってタンクにする物も2種考えられた。（コアブロック有と無で2種）また飛行ユニット全体も独立して支援用攻撃機として、さらに中間にRX78を包む形で飛行が可能であつた。個別名称はGパーツと呼ばれ、RX78を入れた状態ではGアーマーと呼ばれた。

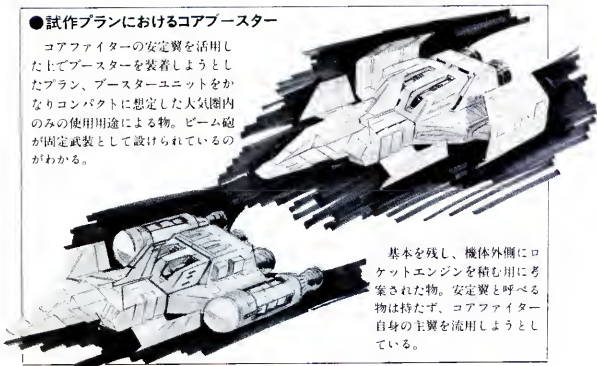
試作されたパーツは2機分で、半端実験部隊用に製作されたも同じである。

コアファイターの戦闘機としての能力は意外にも高かつたため、Gパーツでは支援用戦闘爆撃機化が設けられたが、コアファイターをより有効に使用するために、飛行用ブースターが別設計された。コアファイターを操縦ユニットに流用するのはRXスーツと同じだが、こちらは純粋な戦闘機としてのオペレーションである。コアファイターの後部に大型のジェット・ロケット兼用エンジンを配し、固定武装としてビーム砲が設けられた。

運用は大気圏内外両用で、大戦末期から実戦配備が行なわれ、地上での有視界航空戦でも多大なる戦果を示した。宇宙空間での使用のみで設計が開始されていただけに、空間での使用も良好で、支援の役割をうまく果たしたと伝えられる。本機は終結までに16機が生産され、6機が実戦参加している。

●試作プランにおけるコアブースター

コアファイターの安定翼を活用した上でブースターを装着しようとしたプラン、ブースターユニットをかなりコンパクトに想定した大気圏内のみの使用用途による物。ビーム砲が固定武装として設けられているのがわかる。



基本を残し、機体外側にロケットエンジンを積む用に考案された物。安定翼と呼べる物は持たず、コアファイター自身の主翼を流用しようとしている。

増加武器によるガンダムの強化計画

「AAA」として進行したRXスーツを中心とした連邦軍の軍備は、モビルスーツの大量生産と、高性能化であった。「V作戦」の中からは、上層部が期待したニュータイプ覚醒が見られ、その能力増大に伴ないモビルスーツ自体の運動性能に改善が要求されていた。

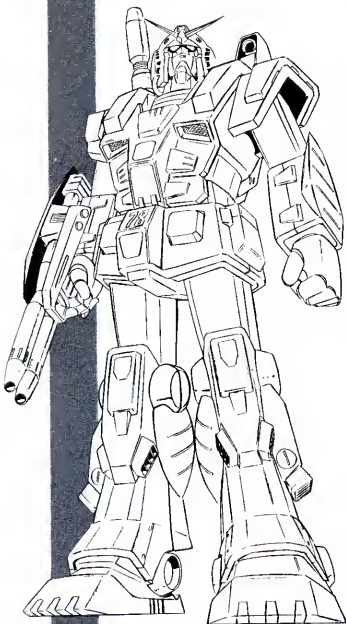
大戦終結の兆しが見えてきたところで、連邦軍で計画がすすめられていたのはRX-81とRX-78タイプ用の増加ウェポンシステムであった。ウェポンシステムは、現存するGナンバ―機分だけ製作し、特殊パイロットを集めて編成する物であった。RX-81とは、段階としてニュータイプパイロットが使用した時の78タイプを目安に、機動性と武装を強化するという物である。基本的にはこのタイプがRX-78の完全量産と呼べる物であり、RGM-79を量産型の78と判断するのはいささか疑問である。事実上ごく一部の人間の間でしか知られずであり、企画案もコード名だけが先に通ってはつきりした78の改修部等の指示はなかった。またRX-81に関しての外形とスペック、運用面での特徴は記録が残っておらず果してどの程度まで研究が進められていたかは定かではない様である。

計画案として実動す前にあった増加ウェポンシステムはFSWSのコードと呼ばれ、装着状態のRX-78は、FA-78-1の呼称が与えられる予定であった。パーツは比較的装甲使用度の高い部分に設置され、胸、肩、腰、腕、脚にRGC-80と同様に簡易装着型として設計がすすめられていた。

武装は、背部パーツに一体化してロケット砲を装備し右腕には二連装ビームライフル、肩と膝にはミサイルペイが取り付けられる様になっていた。機動力を補なうために、背部と脚部には補助推進装置が用意され、この計

画案には両腕、両足のシステムの違う物も用意されていた。脚部にはコアブラスター並みのロケットエンジンを付け、緊急時には脱離、両腕には固定武装でビームサーベルが一体化されるというプランである。

RX-78ガンダムは終戦を迎えたため、本来の満足の行く性能を充分に発揮できたとは必ずしも言いえる事はできない。増加ウェポンシステムは、重量が倍加するため実際の効力については何とも表現しかねるが、このプランの延長上にRX-81のある事は刻んでおきたいところである。



水中用MSの開発

シオンが地球侵攻作戦開始の折り最も頭をいためたのが、上陸用リフティンクカフセルからのモビルスーツの移動展開であった。とう考慮しても、地上へ降下した際には着陸には海を使わざるを得なく、水中または水上でのモビルスーツ移動に艦船を用いることしかなかった。

この予測される事態にシオン技術陣でモビルスーツの水陸両用化の研究が進められた。水中での行動力と各種武装のテストのため、サクタイプを改造して水流エンジン（のテスト）がくり返された。このタイプはロールアウト後の水陸両用MS開発プロジェクトの確立と共にMSMナンバーの01を与えられた。水流エンジンのテスト等は極めて良好と言えたが、サクタイプ基本フォルムによる抵抗のため、運動性能は悪く、核反応炉の出力不足でサクの水陸両用化は最初の7機のプロトタイプで打ち切りとなっている。

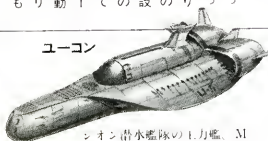
水陸両用MSの開発は、単に独力による移動だけではなく、反応炉の冷却にあり余る海水を使用できる点にあった。すなわち高出力の反応炉搭載によって戦艦クラスで初めて使用可能なメカ粒子砲をモビルスーツに使える

というわけである。

MSMナンバーは、続く02と03が製作で進行した02・03共に抵抗をなるべく少なくし、03タイプでは腕と脚の引き込み化も計られた。02タイプはサクをイメージに残しており、どちらかと言えば、地上戦での性能に期待が出来るタイプである。両者共に固定武装しか持たず、総重量38・7tにも及ぶキアM-23メカ粒子砲が内蔵されていた。武装はMSM-02の方が多く、両肩に2基ずつのロケット砲、背部エンジンの中には水中推進時に真上を狙えるロケット砲が2門装備されていた。どちらも少数ずつが先行機の形で生産され、03タイプが後期型になった時点で、02タイプは生産中止となり、03へ生産ラインをゆすり渡した。

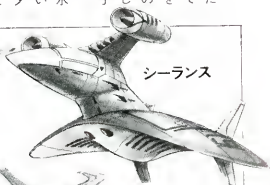
海軍力を持たないジオン公国は地上施設の占拠によって潜水艦隊を編成しつつ侵攻をすすめた。設計は遅かったため、あらかじめモビルスーツ搭載が考慮されており、機動力の高い潜水艦隊として確立されていた。水上での連絡には航空機を使わず、高速水上艇としてトッフの設計を利用したシーランスが作られている。水上戦闘機の能力は無いが、かなりの高速度で移動が出来たとされている。水中用MSはさらに範囲を拡げ、モビルアーチャー構想の参入以後は、潜水艦並みの質量を持つ高機動水中MSへ統合化がすすめられ、逆にこれらMSMシリーズの展開によってモビルアーチャー化への逆進行効果もすすめられた。

ユーコン



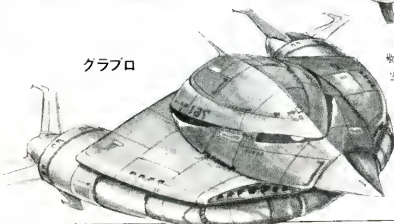
シオン潜水艦隊の主力艦、MSMクラスを2機搭載可能。

シーランス



高速水上連絡艇。各艦に1-2機搭載。

クラブロ



水中戦用大型モビルアーチャーMSMタイプの複数用にも使

MSM-03 ●ゴック

MSM-03ゴックは第一期水陸両用モビルスーツとして、MSM-02と競作の形で開発された。高出力の熱核反応炉を持ち、メカ粒子砲の使用を前程として、独力の行動能力を有する水中戦汎用タイプである。両腕、両脚は、スライドして本体へ一部収納される様に工夫されており、極力水中での抵抗を少なく設計されている。先行期間より2ヶ月を経て、量産型が生産され、沿岸基地と潜水艦隊へ次々に配備がおこなわれた。

ゴックタイプの水中での移動力は、最高速度70ノットをマークし、重装甲を活用して上陸侵攻に多大なる戦果をもたらした。地上での行動時間には、冷却上の制限があったため作戦時間をそれほど長くとれなかったが、河川区域の戦闘では、連邦の防衛設備をことごとく撃破したと伝えられる。



MSM-07S ●スゴック

本来ならば、MSM-03に並んで04の開発ナンバーが与えられるはずであったが、03の提出するデータに基づき、改良の代行使したため、完成を遅らせた。メカ粒子砲は腕に設置され、頭部には240mmロケット砲が6基装備された。同機はロールアウトがおくれたため、03の後期型とラインを同じくして生産がすすめられた。ナンバーはMSM-07としてスゴックの名称で呼ばれた。

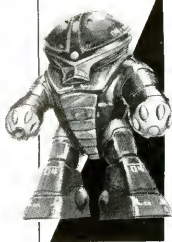
潜水艦隊へは除々に配備がすすめられたが性能面では03タイプをはるかに上回り、地上戦での戦闘力はザククラス、またはハイロットによってはザク以上と言わしめた。

同機の生産と集散はキャルフォルニアが代行し、地上侵攻で陸戦から海洋方面へのパイロットの変換後であったため、装甲の厚いMSシリーズは戦果に比して死傷者はそれほど記録されていない。



MSM-04 ●アッガイ

MSMシリーズ中最もザクモビルスーツの運用に近いのが、このMSM-04アッガイである。ザクタイプの反応炉を改造して作られたタイプを装備し、軽量化が計られた機動性は比較的高く、複座として設計されたのでMSMシリーズ用に訓練用として用いられる事が多かった。廃熱度が低いため、偵察用としての任が、このアッガイタイプの主な物であった。水陸両用型としてよりも、その状況に附随して、地上戦での効能に得る物は大きかった様である。陸上での性能は大いに評価され、アソカイを基本として、陸上戦用特殊モビルスーツアッグタイプシリーズも並行して作られた。こちらは主として、ジャブローの本拠を叩く作戦に促した物で、対湿度はあるにせよ、水中戦は想定されなかったようである。



MSM-10 ●ソック

水中戦用MSの中でも最も異様を極めたタイプ、もはや局地戦用の移動メカ粒子砲座と呼ぶにふさわしく、移動用の脚部はモビルスーツのそれとは異なる物ではなかった。モビルアーマー構想の過渡期に設計進行された物であるため、差し戻してモビルアーマー的な要素が強い。

本体には全9門のメカ粒子砲を有し、限定的な使用用途の際たる物として完成した。小型モビルアーマーとして量産化は決定していたが、プロトタイプが全部で3機製作されたところで終戦を迎えた。2号機はジャブロー攻略戦に参戦したが、撃破され、残る1、3号機は北太平洋の「マンタレイ」ヘクラフロ2機と共に配備された。これらは一度も実戦に出なかったが、1号機は輸送中の潜水艦ごと対潜攻撃機によって撃破された。



MOBILE SUIT VARIATION

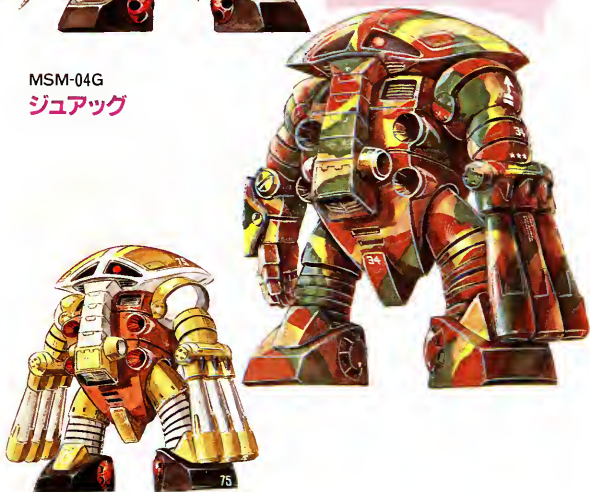
MSM-04N

アックガイ



MSM-04G

ジュアック



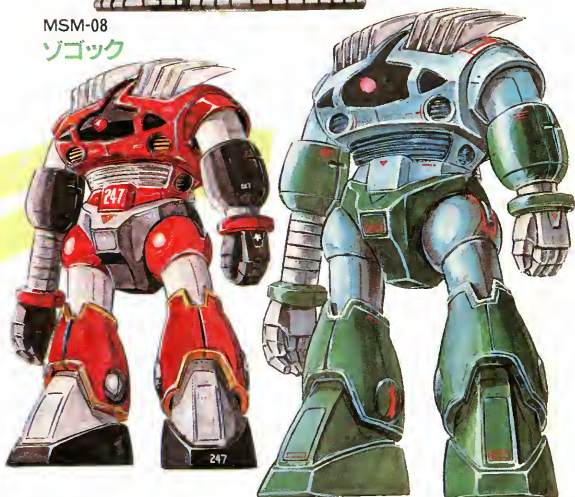
EMS-05

アック



MSM-08

ゾゴック



ジオン軍の特務用MS

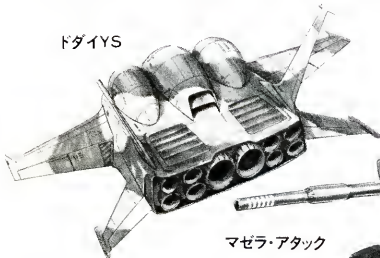
ジオン公国のモビルスーツコンセプトは、基本的にモビルスーツ単体に対して多くの汎用性を求めたため、用途変えのタイプに関してはほぼ新型をおこなねばならない実情に絶えず追われていた。よって国力の貧弱なジオンの体制としては、限られた基本から出る事なく種々の状況に対処しなければならない運命を背負っていたのである。

殊に連邦軍のコアブロックシステムの様なプランを当初考えられなかった事は、戦線の拡大化と膠着化に大きな影を落としてゆく事となり、限定使用の目的に対しては、基本設計をあらためる必要性が生じていった。第一の問題はモビルスーツ機動部隊の移動力である。地上侵攻作戦において、サクにある程度の見切りをつけたジオン軍部は陸上戦用にMS-07を開発し、各地への実戦配備がすすめられたが、この時点でも走行速度に制圧区域の拡大化が進めにくかったのは事実である。ジオン兵器開発部で提案されたのは、モビルスーツ自体に飛行能力を持たせる物であった。このプランには当然無理が生じたのは明らかであり、局地戦用に開発配備されていたドタイプにモビルスーツ搭載性を持たせる事で除々に改善されていった。移動力の問題は憂慮された期間が比較的

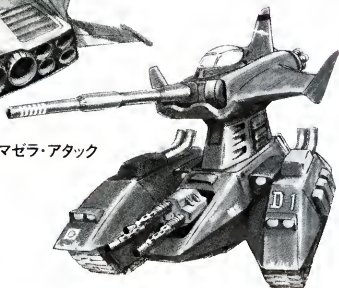
長かったが、MS-09タイプの開発によってほぼ9割は実戦投入と同時に解決を見たと言える。

もう一方は量産ラインの生産性の問題がある。本来モビルスーツの効用は戦闘時のみの物ではなく、作業性の面も比率としては大きい。サクによるサクの運搬や整備は当然の事であり、人間型の拡大は伊達ではなく、サクに搭乗しての一二〇mmマシンガンの独自分解、整備、組み立てさえ可能であった。但し先述の様に生産率の低さから最前線へあまねく兵器が送り込まれるという事もなかったわけである。そこで現地案の吸収によってサクの上半身を利用してマゼラアタックと簡易に組み合わせた作業車輛が製作された。実戦時に使えない事もなかったが、主に工作用、作業用車輛としての有効性を示した。サクタンク自体も使用不能となったモビルスーツの再利用だが、逆に回収車として大いに貢献した様である。戦闘用特殊MSとしては、ジャブロー攻略のみを目的として製作されたアッグタイプと呼ばれる物がある。これは兵装と機能を分担し一用途のみのスーツ3種をチーム化して使用する。先峰として堀削用が道を開き、重火器で強行、格闘戦用スーツが白兵戦にのぞむという極めて限定された用途による物であった。アッグタイプはその極端な例だが、水中戦用、水陸両用、湿地帯用モビルスーツの後期の使用目的は、ほぼジャブロー攻略に基づく物であり、大戦末期における地上戦用スーツは、各地での使用に方向性を限定していたと言えるよう。

ドタイプ



マゼラ・アタック



MS-06E ● 強行偵察型

初期からの宇宙空間戦には、MS-06タイプのみでの戦闘展開が進められた。ここでMS-06タイプの機動力を利用して、戦略偵察機への転用が考慮された。装甲性はほぼ同じであるため、実際に探知システムの交換性を高めて設計した場合には、偵察型の即時武装化も可能であったからである。MS-06Eとして承認されたタイプは、通常のCタイプやFタイプから兵装に必要な部分を極力削除し、燃料スペースを10%増加し、機体各部に探知システムを装着した物である。頭部モノアイは、接近戦用のカメラを大口径の高精度タイプに換装し、カラスシールドの廃除とモノアイゲージの縦ローリ化も可能としていた。新設置のカメラは、両肩に1基ずつさらに腰の関節ブロックを前方へ延長しカメラを収納していたメインのロケットバーニアに加えて、機体左右胸部には緊急離脱用ロケットが装着されており、この部分が通常の06と異なる部分であった。さらに大戦中期には頭部カメラを3基にして、背部に折りたたみ式複合探知システムを装備した改良型MS-06E-3も16機が作られている。プームの形状から「フリッパー」の愛称で呼ばれた。



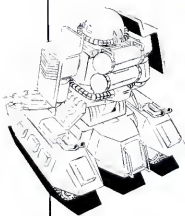
MS-07H ● 飛行試験型

地上戦用モビルスーツMS-07は、MS-06Jに代わるべく生産と配備が行なわれたが、移動力を向上させるためモビルスーツに飛行能力を与えるプランが配備とほぼ同時に提案された。推進システムは脚部を中心に強化され、背部のロケットバーニアに加えて腰にも同様に2基の推進機が設けられた。量産先行型のYMS-07A3機とB1機は直ちに仕様を統一し、計4機はサイド3での改修作業を終えてアリゾナのフラットネイル基地へ運ばれてテストを開始、航空機部門からビリー・ウォン・ダイク大尉をチーフとして6名のテストパイロットチームを編成して4週間の準備期間内に4機総計で38回のテスト飛行が行なわれたと記録されている。その後YMS-07Bをベースとした4号機は、脚部推力を増強し、機体肩の装甲を整流効果上形状変更し、腰にはベントラルフィンを設けたMS-07H-4として改造された。但し出力アップはしたものの、換装したエンジンのトラブルが続き、テスト開始後10日目にテストパイロットのフランク・ベルナル少尉を乗せたまま空中爆発で同機は失なわれている。

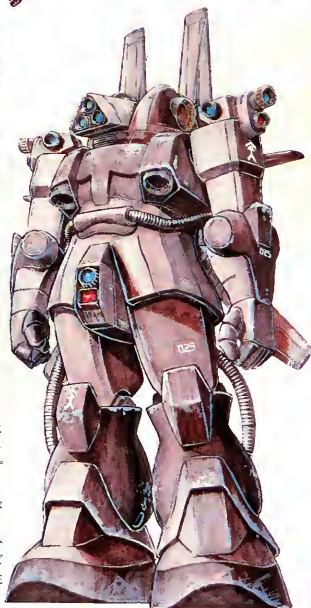
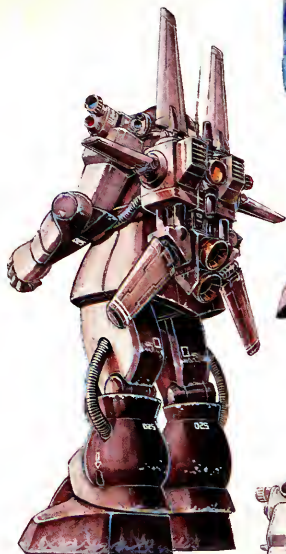


MS-06V ● ザクタンク

モビルスーツの戦場での作業性は、ザクによるザクの回収、整備、またマシンガンの分解、整備、組み立てまでが可能である程の物である。但しモビルスーツの生産性と戦場への輸送は机上で考えられる物ほど甘くはなく、実際にはモビルスーツによる侵攻が激化してからは、単に戦闘のみに振り向けられるという状態であった。戦闘能力の欠如したモビルスーツの再利用は戦場からの提案によって有効な物となる。モビルスーツのいわゆる「腕」の効用を活かした作業車輛である型式番号を一応順当にMS-06Vとしてはいる物の、内容はマゼラベースの上へザクの上半身をのせるだけの物で、操縦スペースを無くして腰の可動ユニットを設けただけの物であった。試作という程の事もなくアフリカ戦線において作業中隊の現場改造でこの組み合わせが行なわれた。ザクタンクの愛称による同機は全て「再利用」の形で生産され、工作作業に有効性を見出すかたわら、一部武装して陸戦オペレーションにも参加している。マニキュレーターは様々な物が装着され、名称別に正式に分けられるという事もなかった様である。



MS-06E ザク強行偵察型

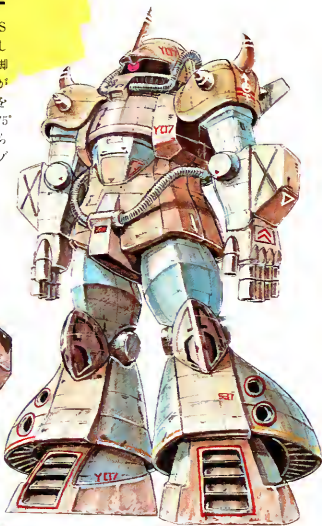
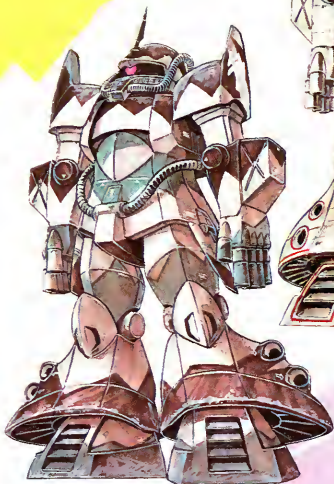


▶頭部メインカメラを3基とし、背部に複合探知システムを設けたMS-06E-3。大戦中期から通常の偵察型Eタイプを改修し、総数16機が生産された。

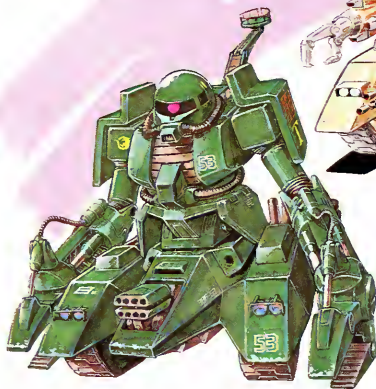
背部の探知システムは平常時にはすべて後方へ向けて折りたたまれ、タンクとブースターをオプションで装備する場合もあった。「フリッパー」の愛称で呼ばれ偵察行動に従事したが、実際に有効性を見出さる状況自体が減少していた。

MS-07H グフ飛行試験型

▼試作されたHタイプ4機の内、YMS-07Bをベースとした物をさらに改修した性能向上型MS-07H-4タイプ。脚部の推力を増強し、外見的にはフレアが大型化している。肩の装甲は整流効果を考へて形状変更され、左右腰側面には75°可動のベントラルフィンが新たに設けられている。同機はテスト10日目にアリゾナにおいて事故で失なわれた。



MS-06V ザクタンク



◀作業用マニピュレーターを大型化したMS-06V-6。作業等はザクの歩行システムをフルに活用するはずだったが、再生産の有効性からこれら変形型モビルスーツは、戦場での各種作業には比較的小有意義な存在であった。

モビルアーマーの開発と発展

汎用宇宙機として承認され短期戦での能力をいかに発揮したモビルスーツには局地戦用概念が進み、支援用にスーツコンセプトから、もう一度逆行した兵器のフーランが進められた。攻撃力に要点を絞ったこの計画はモビルアーマーという名称を得、単に移動支援兵器としてモビルスーツよりはるかに重装甲、重武装化が見込まれた。これはモビルスーツ研究に一歩先んじたジオン独特の解釈である。

○アッザム

そもそもモビルアーマーへの先がけとなったのは、移動式対地攻撃兵器として月面へ配備されていたG87ルナタンクである。これを地球上での使用に耐える様に改修したのがMAX-03アッザムである。モビルスーツからの名称イメージより考えると系統の関連はほど遠い物と言える。当初のモビルアーマー構想導入後最も近い存在として改修を受けた物であったが、移動砲座のしめる比率の方がかなり大きかった様である。実戦投入は比較的に早く、ミノフスキークラフトの使用である程度の移動性はあったと伝えられる。輸送上の問題から試作機2機が作られたにとどまり陸戦上の運用はうやむやに消えたも同様であった。

○グラブロ

水中戦用としてMSMシリーズと並行して試作が行なわれた。モビルアーマーには開発コストが多にかかるため、使用目的を単純に分割して各案がすめられた。MAM-07グラブロは設計と並行して試作準備がすめられ、サンディエゴの潜水艦ドックにはグラブロ用に機材が集められた。試作から機体の完成までは1ヵ月半を要し、主にテストはメキシコ湾を拠点として大西洋上で行なわれたと伝えられる。グラブロの航続性能は中型潜水艦のそれに匹敵し、なおかつ対艦攻撃の際には「両腕」を活用して接近攻撃を仕掛けるという極めて異様な攻撃方法をとる事が出来た。

○ビグロ

第一次モビルスーツ設計提案要請において人型モビルスーツと、在来型宇宙用ホッドが競い、後者は結果的に退いた形となった。モビルアーマー構想参入によってグラブロとこのMA-05ビグロにはそのフーランが継続された。ビグロタイプは戦闘ホッドの形状にモノアイシステムを一体化し、推進エンジンには六八〇tの物が2

アッザム

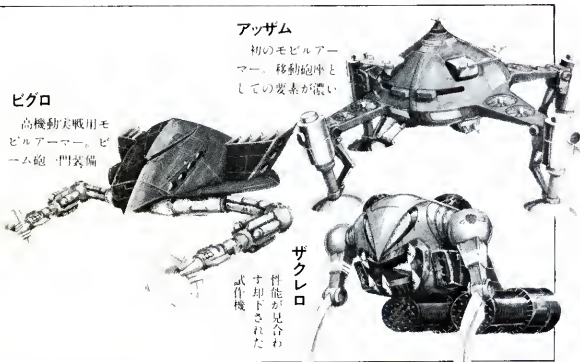
初のモビルアーマー。移動砲座としての要素が濃い

ビグロ

高機動実戦用モビルアーマー。ビーム砲一門装備

ザクレロ

性能が見合わず却下された試作機



基装備された 武装は機首にメガ粒子砲を1門装備し、機首後方左右に4門ずつ計8門のミサイルランチャーを固定武装として有する 設計チームの共用から、北米ベイスで製作され初期型として14機が生産された、モビルアーマーの単独による攻撃力も大きい、モビルスーツ部隊のビーム兵器標準装備化に伴ない、防衛戦用としての効力が見込まれたからである

○ザクレロ

試作設計は実の所ビグロ、クラブロに先行してすすめられていたが、開発メーカーの不手際から推進機の出力不足で採用機としてのナンバーは与えられずに放棄されていた 但し武装のテストベイスとして第3区テストセンターで拡散ビーム砲が装着されて4回のテストに使用された

○ビグ・ザム

攻撃力重視のコンセプトを末端拡大化した末の産物である 移動可能な兵器としては、恐らく最大、最強の物と考えられる 但し稼働させるためには大型反応炉4基を臨界点にまで引き上げねばならず、その後実際の戦闘時間は平均15分程度であった

ビクサムの製作目的は、連邦軍の拠点たるジャブローを叩く事にあり、量産後は個別に大気圏下へ降下しビグサム一機を単体として中隊規模による臨時攻略が予定されていた 但し本国からの運搬にはビクザム一機につきムサイ艦一隻が必要となっていた

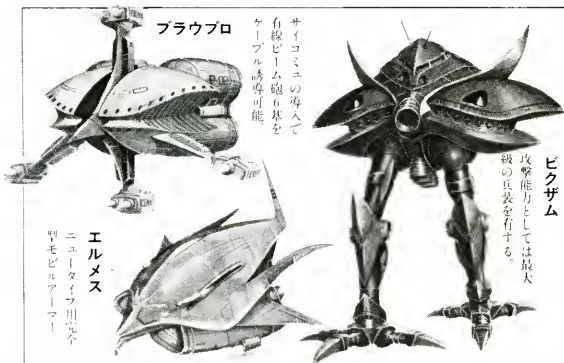
ロールアウトした1号機は本国から「ソロモン」にハーツ状態で運ばれ、防衛戦で司令官トズル ザビ中将自らが搭乗して臨時にして主砲メガ粒子砲、周囲小型砲に威力をふるわせ戦艦9隻を撃破したが、RX 78との交戦であえなく消失した

○ブラウ・プロ

ニュータイプハイロット用として実験的に作られたモビルアーマー 有線によるメガ粒子砲の立体攻撃を行なわせるため、機体自体は大型の突撃艇並みの質量を持っていた バイロット擁護が切実であったため、機体はメインエンジンユニット2基を含む5個のフロックに分離が可能となっていた 運用形態は完全に戦闘機型に戻されていた 本機は1・2号機が続けて製作されサイコミユコントロールシステムのデータ回収を主な任務として実戦投入はされなかったが、両機共に試験中に交戦、1号機は撃破、2号機は個別に戦闘参加して破壊された

○エルメス

ニュータイプ用モビルアーマーの究極 振動数の高いニュータイプハイロットのみに使用可で3機が製作された 有線ビーム砲は廃除され、本体の格納スペースに10基の無人攻撃ホット「ビット」を搭載していた ビットには各々ビーム砲と高機動バーニアが装備され、ニュータイプハイロットの感應波を受信して自在の攻撃を仕掛ける事が出来た、2・3号機はラアラ スン少尉、クスコ アル中尉が搭乗したがRX 78との交戦で消失



ブラウプロ

エルメス

ニュータイプ用完全型モビルアーマー

ビクザム

攻撃能力としては最大級の武装を有する。

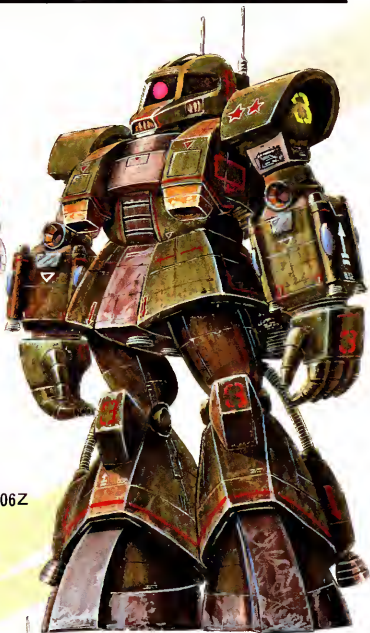
MOBILE SUIT VARIATION

MSN-02

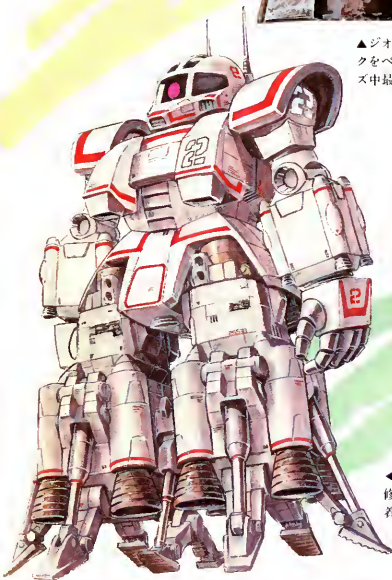


▲ゼロサイコミュシステムを導入した人型モビルアーマー。脚は不用とも言え、機動性は高かった。

MS-06Z



▲ジオングのテストベースとしてザクをベースに改造した物。06シリーズ中最も原型と異なるタイプ。

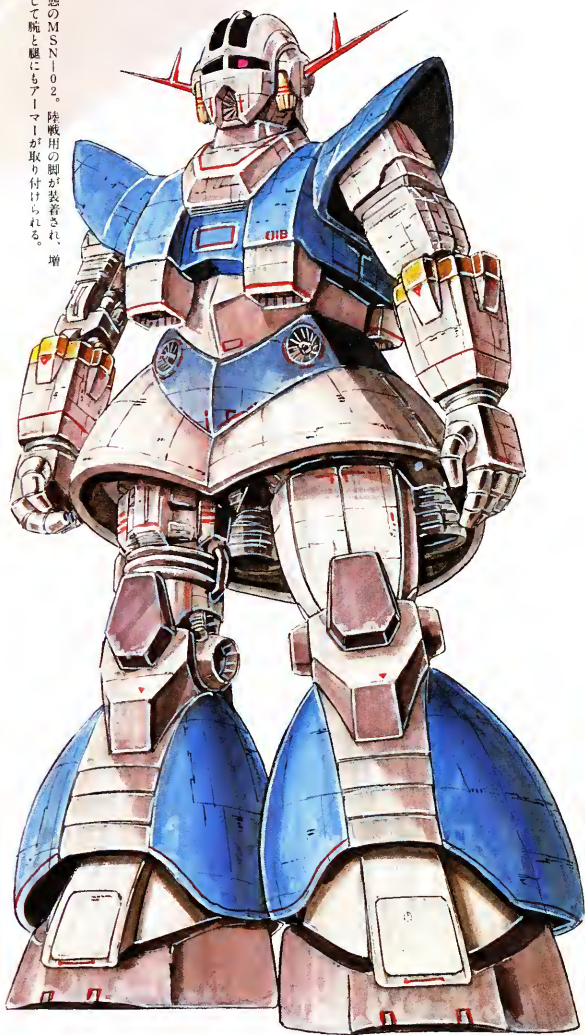


MSN-01

◀Zタイプを基本に2号機を改修した高機動型。脚は固定で降着用のプレートギアを使用する。

MSN-02 陸戦用歩行ユニット装着オペレーション

▲完成状態のMSN-02。陸戦用の脚が装着され、増
加装甲として腕と腿にもアーマーが取り付けられる。

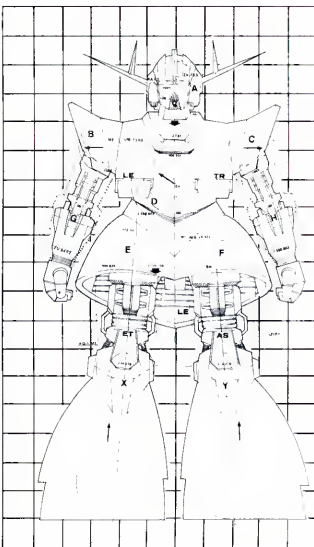


MS-06Zから MSN-02ジオングへ

MS-06ザクIIシリーズは数々の局戦用派系型、研究母体を生んだが大戦終結2ヶ月前よりザクの派系最終型の設計提出が行なわれていた。サイコミュンシステムを使用するMS-16タイプの基本となるテストベース機である。MS-06Zの開発名称を与えられた本機は、両腕に5連装ビームライフルを有線ケーブルを含んで装備する事が第一に課せられた条件であったが、有線ビーム砲の小型化が効かないため、通常のザクの腕の部分

に巨大な腕が代わりに付く形となっていた。高機動戦闘によるサイコミュンオペレーションのデータを必要とするため、機体はMS-16の基本フォルムを縮小してザクの各所に大出力ロケットエンジンが装備された。極秘にテストにまわされたのは3機のZタイプで、「コードネーム『ビショップ』」と呼ばれた。

Zタイプは陸戦用の脚を持つが、製作された3機の内2号機には加えて改修が施され、腰内部より下の歩行ユニットが



取りのぞかれ、代わりにむき出しで4本を1本にまとめた大ロケットエンジンを2本計8基のエンジンを搭載したモビルアーマー並みの機動力を持つタイプへと生まれ変わっている。但し試験時のわずかな時間のみの使用に耐える物で、燃料搭載量の割には、一般的とは言えなかった。MS-16の名称変更時に合わせてMSN-01の名称が与えられている。

MS-16として製作がすすめられたモビルスーツは人型モビルアーマーとしての要素が濃く、次代をになうニュータイプへのさきがけとして期待を背負った、「ジオング」の名称が付けられた。本機は移動に足が必要としないため、スカートを大型化し、大推力エンジンを集中して装備していた。装甲も完全でないまま、ア・バオア・クーの工場施設で工作調整が続けられていたが、最終戦への突入によって稼動状態までこぎつけた段階でシヤア・アズナブル大佐が使用、RX-78を撃破にまで追い込んだが、工場に工作中的の歩行ユニットと2号3号機を残したまま大破消失している。MSN-03ジオングでは、脚も含めて7ブロックから成るオールレンジ攻撃も計画されていた。



●メカニカルデザイナー

大河原邦男氏へ

MSバリエーションに
ついてインタビュー
その②

聞き手 MJ編集部

●昭和58年4月5日、大河原邦男氏がご家族と一緒にバンダイ静岡工場を訪問された。そこで、MSバリエーションについてのインタビューをお願いした。

MJ 4月中旬にMSVの第一弾として06Rとザクキャノンが発売されます。

大河原 それは、楽しみですね。

MJ 第一弾は、このほかに水中用ザク、デザートザク、プロトタイプドム、ゲルグクキャノン、GMキャノン、ガンダム試作型の8種類ですが、第2弾の企画を大河原さんから説明してもらえますか。

大河原 そうですね、まず偵察用のMS-06E、サイコミュ・システム実験用の06Z、ザクタンク、クフの飛行用試験タイプ07H、ガンタムの増加ウェポンシステム装備型、歩行システムつきのジオンク、そう、そう皆さんがよく言う足つきジオンクね。

MJ バンダイとしては、6種類ともキット化の予定で企画を進行中です。まだ完全に企画決定されたわけではありません。ガンタムの増加ウェポンシステムはどのような発想なのでしょうか。

大河原 判りやすく言えば、ガンタムのヨロイですね。デザイン上では増加装甲の着脱が可能なように考えてあります。是非、プラモデルの方でも実現してもらいたいですね。

MJ バンダイ静岡工場の設計スタッフ一同、努力します……。さて、ザクタンクについて語っていただけますか。

大河原 ザクタンクはマゼラベースにサクの上半身を取りつけた作業用MSという想定で考えました。最初、デザインした時はリアスタイルを考えていなかったのです。「コミックボンボン」誌で川口克己さんが作例をやってましたが、ハウィーショベルのような物をつけてあって、よかったですね。MS以外のガンタムのメカではマゼラアタックは気に入っているデザインなんです。

MJ 模型化の予定はありませんが、ガンタンク量産タイプというのがありますね。

大河原 ガンタンク量産型というのは、随分、後になってデザインしたんです。私はその時やっている仕事の影響が出てしまうので、ちょっとタグラム風な感じ

でしょう。もし、模型化されるならガンタムのコンセプトに合わせて修正してみたいですね。

MJ クフの飛行タイプというのは……。

大河原 トダイVSを使用する前にグフの自力飛行を考えて開発されたMSです。まあ、詳しい設定はストリームベースのみなさんにうかがってください。

MJ (06Rのテストショットを取り出して)最後に、MSVの模型化についてご意見を聞かせてください。

大河原 1-44というスケールですね。私としては、もっと大きなキットを出して欲しいですね。

MJ 人気の高いMSVについては、1-00、1-60を検討中です。

大河原 期待しています。

MJ ありがとうございます。

「模型情報別冊・モビルスーツバリエーションハンドブック第二集」

構成・小田雅弘(ストリームベース)

イラスト・大河原邦男

マーキング設定、イラスト協力・増尾隆幸

レイアウト・藤森尚隆

協力・講談社、日本サンライズ、高橋昌也

G7アーマー



Gスカイ



G7ル



G7アースター



※計画が流れていた長年のコアプ用の増強ウェポンシステム。このシステムは、現存するGシャーパー機分だけ製作し、残機パイロットを集めて編成する物であった。計画案として実施予定にあった増強ウェポンシステムはF8WSのコードと呼ばれ、装束形態のRX-78は、F8WS-1の呼称が与えられる予定であった。パーツは、比較的装甲使用量の多い部分に選定され、胸、肩、腰、脚、腕にRG-98と同様に継ぎ足し型として設計がすすめられていた。このプランの延長上にRX-014がある。